論文の内容の要旨

論文題目　「非行」と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループの実践と機能
——ナラティヴ・コミュニティのなかでオルタナティヴな語りが構築される文脈に注目して——

氏名　　北　村　篤　司

第１部　研究の展望

問題と目的（第１章）

「非行」の問題では，親は「非行」の原因として批判されがちであるが，近年は非行少年を抱える家族への支援の重要性が指摘されている（生島, 2002; 山本, 2005）。また，当事者である親を中心としたセルフヘルプ・グループ（以下，SHG と表記）も組織され，社会的なニーズを受けて各地に広がってきた（「非行」と向き合う親たちの会, 2006）。このような SHG は親のサポート資源として重要な役割を果たしていると想像されるが, どのようにそれが機能しているのかという点は，十分に解明されていない。

SHG に関する研究においては，近年ナラティヴ・アプローチが有力になっている。これは，SHG を「ナラティヴの共同体」として捉え，参加者自身の意味付けや体験を探求するものである（Rappaport,1993）。ナラティヴ・アプローチは，①専門家中心主義を避けられる，②参加者の変化を社会的なプロセスと結びつけて理解できる，③SHG の機能を統合的に説明できる，④当事者と，研究者や専門家との協働の可能性を広げるといった意義を持つ。一方で，先行研究においても，参加者の語りが変化するプロセスや，オルタナティヴな語りがどのように構築されているのかという点は十分に検討されていない。

そこで本研究では，「非行」と向き合う親たちの SHG において，参加者の語りや体験がどのように変化し，その変化の過程で，グループがどのような影響を及ぼしているのかをナラティヴ・アプローチの視点から質的に検討する。具体的には，①会に参加することで親の語りや体験はどのように変化するか, ②参加者はどのようにしてオルタナティヴな語りを構築しているのか,

③専門職は語りの構築にどのように関わっているのか，という 3 つのリサーチクエスチョンを探求し，「非行」と向き合う親たちの SHG が，ナラティヴ・コミュニティとしてどのような特徴や機能を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

方法論とフィールド（第 2 章）

本研究では，エスノグラフィーという文脈性を重視したアプローチを採用し，ナラティヴ・アプローチに基づき，「語り」が構築されるプロセスを多角的な視点から捉えることを試みた。

本研究が対象としたフィールドは，「非行」と向き合う親たちの会という，わが子の非行・問題行動で悩んでいる親と子どもに関わる人たちの会である。筆者は 6 年以上にわたり，親たちの会の活動に参加してきたが，筆者のフィールドにおける立場や関係性にも変化があり，外部的な立場と内部的な立場の両方を揺れ動きながら，会と関わってきたと考えられた。

第 2 部　親たちの会における参加者の語りの変化

研究 1：子どもの「非行」で悩んだ親たちの体験――アンケート調査の結果からの検討（第 3 章）

第 3 章では，筆者も調査研究メンバーとして参加し，親たちの会の姉妹団体である NPO 法人が主催して行った，「何が非行に追い立て，何が立ち直る力となるか――『非行』に走った少年をめぐる諸問題とそこからの立ち直りに関する調査研究――」（特定非営利活動法人非行克服支援センター, 2014）の調査結果の一部を提示し，子どもの「非行」を体験した親が，どのような経験をしてきたのかを明らかにした。

親へのアンケート調査の結果からは，多くの親は，子どもの「非行」を止めたいと思いながらも，子どもの言動が理解できず，どうしたらいいかわからないという困惑や苦悩を体験していること。また，自分の子育てに対して自責感をもったり，周囲からも批判や叱責を受けたりする中で，精神的に疲弊している場合が多いこと。さらに，学校や相談機関との関わりが，親の支えとなる場合もあるが，逆に，学校や相談機関の対応で，親がより追いつめられてしまう場合もあることなどが明らかになった。

研究 2：子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの変化――セルフヘルプ・グループへの参加と視点の拡がり（第 4 章）

第 4 章では，親たちの会の参加者の語りや体験が変化するプロセスと，その過程でグループが果たしている役割について詳細に検討した。参与観察および，5 人の親の参加者へのインタビューによって得られたデータを構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Charmaz, 2008/2006）を援用して分析した。

SHG に参加する中で，親の語りは，＜「非行」に巻き込まれる語り＞＜「非行」を捉え直す語り＞＜「非行」を受けとめる語り＞と変化していく。これは，語り手の視点が重層化するなか

で，語りにおける視野や意味づけが拡大し，固定化していたストーリーが変化していく過程として捉えられた。そして，この過程の中で，参加者は，それぞれ，会のナラティヴの視点を取り入れながら，自分自身の体験に即してオルタナティヴな語りを構築していることが明らかになった。また，こうした語りの変化は，日常生活における子どもへの見方や関わり方とも関連しており，語りの変化と連動して，親子間の関わりや関係性も変化していることが示唆された。

第 3 部　親たちの会における語りの構築

研究 3：ディスコースの中での語りの構築――コミュニティ・ナラティヴとの関係に注目して（第 5 章）

第 5 章では，社会で支配的なディスコースとの関係で，参加者がどのようにしてオルタナティヴ・ストーリーを構築しているのかを検討した。親たちの会のコミュニティ・ナラティヴの特徴を明らかにし，社会的なディスコースや，コミュニティ・ナラティヴとの関係に着目しつつ，参加者がオルタナティヴな語りを構築していくやり方について検討した。

親たちの会では，「非行」をしている子どもやその親に対する批判的な見方や，「親は子どもの『非行』を止めないといけない」という支配的なディスコースに対抗し，その影響力を弱めるコミュニティ・ナラティヴが醸成されていると考えられた。語りの中における親のポジショニングは，社会的なディスコースとの関係で語られる場合と，グループのナラティヴとの関係で語られる場合とは異なっており，グループのコミュニティ・ナラティヴは，親のポジショニングの幅を拡げる働きをしていることが明らかになった。また，語りの中で，過去の自分と現在の自分を差異化するポジショニングが用いられることで，過去の自分と結びつける形で社会的なディスコースが外在化され，オルタナティヴな意味づけやストーリーを構築することが可能になっていることが示唆された。

研究 4：やりとりの中での語りの構築――笑いの共有に焦点を当てて（第 6 章）

第 6 章では，参加者の語りや，語り手と聞き手とのやりとりの中で生じる笑いという現象に注目し，笑いが生じるプロセスを明らかにすると共に，笑いを共有するというやりとりが，親たちの会における語りの構築にどのように影響しているのか検討した。参与観察およびインタビューデータについて，エスノグラフィーのアプローチと会話分析の手法を組み合わせ，やり取りの中で笑いが生じるプロセス，語りの内容と笑いとの関連，参加者にとっての笑いの体験，さらに社会的なディスコースとの関係といった複数の側面から笑いの機能について検討を行った。

親たちの会における笑いは，「わかる」「共感できる」という感覚をベースに生じ，語りが自責的・悲観的な方向へ進むことを緩和する。そして，自分の体験や困難な状況を，「『非行』は深刻な問題だ」「親（自分）の子育てが悪かった」といった常識的な見方とは別の視点から捉え直し，オルタナティヴな意味づけを模索することを促進していると考えられた。また，笑いの共有を含んだ参加者間のやりとりは，グループのナラティヴの習得や占有を促進する意義を持つことも考

察された。

研究 5：親以外の参加者の語りの構築への関わり――「ともに」学び，語り合う実践（第 7 章）

第 7 章では，親以外の立場の参加者の語りや関わりに注目し，それが，親たちの会における語りの構築にどのような影響を及ぼしているのかを検討した。参与観察，インタビュー，会で発行されている通信の中で，特に，筆者自身を含めた親以外の立場の参加者の語りや行動について記述されている部分を分析し，親以外の立場の参加者が，グループで何を語り，どのようにグループと関わっているのか，また，逆に親の立場の参加者は，そういった語りや関わりをどのように受けとめているのかを明らかにし，親以外の立場の参加者が，語りの構築にどのように影響を及ぼしているのかを検討した。

その結果，親たちの会においては，親以外の立場の参加者も，「同じ＜場所＞にいる」という意味での当事者性をもって語りの構築に関わっており，それが語りの構築を活性化させ，会のナラティヴを多様で豊かなものにしていく意義を持つことが考察された。

第 4 部　総括

本研究のまとめ――「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能（第 8 章）

本研究の結果から，「非行」と向き合う親たちの会では，語りを受けとめる作用と語りを促す作用が共存しながら，オルタナティヴな語りの構築を促進する機能を持っていること，また親たちの会の持つコミュニティ･ナラティヴの特徴である多様性や流動性がそれを支えていることが考察された。

本研究の意義と課題（第 9 章）

本研究の臨床心理学的な意義として，「非行」と向き合う親の変化のプロセスや，支配的なディスコースへの対処に関する知見を子どもの「非行」や問題行動で悩んでいる親を援助する際の参照枠とすることや，臨床心理士が SHG と協働的な関係を築いていく際の一つのあり方を提示したことが挙げられる。また，SHG 研究における意義は，Rappaport（1993）の提唱した理論的な仮定を実証的に示すと共に，これまで十分に検討されてこなかった SHG で語りが構築されるダイナミックなプロセスについて検討したことである。

今後の課題として，SHG から離れていく人の体験の検討，参加者の語りの個別性や多様性を描き出すこと，本研究の結果を他の SHG における語りの構築のあり方と比較していくことなどが考えられる。